● シリーズ　私の見た日本　Vol.218

東京の緑：多様なスケール

林楠（リン ナン）

中国遼寧省生まれ。2023年、東京工業大学環境・社会理工学院建築学専攻修士課程修了。同年三菱地所設計入社

コロナ禍で日本へ入国できなかった1年間を経て、2022年6月、ついに私は日本に足を踏み入れた。入国後の健康観察を終え、野生動物のように、太陽の光、新鮮な空気、そして自然を求める。成田から東京都心に向かう電車の窓には、最初は田舎らしい景色が広がり、それから徐々に都市の景色へと変化した。電車の両側の住宅は傾いて見え、山のような迫力が私に迫ってきた。日本の都市は非常に乾燥して見え、不安な気持ちが心を襲う。私は癒しを求めて緑を探し始め、以来、私は東京の「緑」に対する経験により注意を払うようになった。

本稿では高度に人工的な都市である東京での「緑」に対する体験を、軒下から庭園まで、小さなものから大きなものまで詳述する。

住宅地の野生

私の故郷である中国の北方と東京の都市スケールは大きく異なる。私の故郷は寒冷地で、日照時間に関する厳しい建築法規があるため、建物の密度は東京よりもはるかにまばらである。道路のスケールも異なり、東京の密集した住宅地では私の故郷では見られないような幅の狭い小道が見られる。しかし、そんななかでも東京の住宅地には至る所で緑を発見できた。中国の大規模な緑地とは異なり、東京の住宅地の緑は星のように点在しているのだ。高密度の住宅地でも人々が緑を楽しむために様々な工夫が見られた。

まず、住宅のプライベートな緑地についてである。東京の住宅地を歩くと、季節ごとに異なる植物や花が楽しめる精巧なガーデニングが時折現れる。視覚的、嗅覚的にも楽しく、私にとっては日常の癒やしだ。私有地での植栽は個人の趣味の一環だが、地域全体のイメージ形成にも寄与している。ガーデニングは庭を持つ住民にとっては当前かもしれないが、東京の高密度な地域において庭のない住民たちによる植栽は身近な物で工夫して作り出され、非常にユニークなものが多い。

例えば街並みを見ると、同じような時期に建てられた住宅地に連続して窓手すりが設置され、日本独特の景観を作り出している[1]。このような窓手すりは、近隣商業地域に隣接する住宅に多く見られる。道路に近くガーデニングのためのオープンスペースがないため、窓手すりの園芸の様々な可能性が模索されてきた。植木鉢を置くという基本的な機能だけでなく、小さなサイズの窓手すりの場合は、窓手すりに植木鉢を吊るしたり[2]、窓手すりに棒やナイロン製のネットを束ねてつる性植物を上に登らせるなど、立体的な使い方もされている[3]。

植栽にとっても境界線は非常に重要な概念であるため、平面上では植物は私有地に厳密に配置されているが、境界線となるコンクリートブロックやエアコンの室外機、階段は、植物を置くための即席のスペースとなり[4]、立体的に錯綜した美を生み出している。風景としての植物は私有と公有を気にせず、この個人のガーデニングの趣味が利他的な風景を作り出していると感じる。

谷中で見た盆栽の例では、1950年代に植栽された松の木が植木鉢から地中に根を張り、いつの間にか大木に成長していた[5]。街路樹の鉢植えにこのような輝かしい未来があるとしたら、100年後の東京はどうなっているのか楽しみである。

小さな公園（日常）と社寺（非日常）の混在

高密度な住宅地でよく見られる緑地には、公園と神社･お寺がある。しかし、私が驚いたのは、もっと一般的な近隣の小さな公園だ。

道路脇や住宅地の真ん中にある数十平方メートルの小さな空き地が公園になっていることがある。美しい造園植物が植えられた手の込んだ公園から、子どもたちが遊ぶための砂場があるだけの簡素な公園まで、これらの公園には豊かさと質素さが共存している。また、一見すると適当に配置されたベンチが、蔓が絡みついた屋根で覆われていることがよくある[6]。この屋根によって､夏には鬱蒼と茂った葉が暑さをしのぐ木陰を作り、冬にはまばらな葉が暖かな日差しをもたらす。大人たちはここに座って子どもたちの成長を見守っていた。緑は空間を彩るだけでなく、時間とともに変化するので、地域の住民の記憶により印象的に残る風景となるのかもしれない。

神社も多様なスケールと驚異的な密度を持っている。中国には「举头三尺有神明（見上げて三尺のところに神明あり）」という古い諺がある。自分の言動に注意を払うようにという意味だ。日本はこれを物理的に実践していると思う。日本の神社の規模は、住宅街の規模に合わせて調整されており、特に私はミニチュアのように小さい神社が興味深いと感じた[7]。私のステレオタイプ的な神の住処のイメージは隔離された神聖な山の上だが、日本の神々は都会の中で隠遁生活を送っているのだ。神社の規模に関わらず、植物は神々の領域から俗世を隔離する境界として機能し、私を都会から八百万の神々がねぐらを支配していた太古の時代へと連れ戻してくれた。

都市の中の自然

上空から都市を見れば、日本の公園の規模の大小に驚くだろう。小さな公園が住宅地に散在している一方で、新宿御苑や明治神宮のように、都心には大規模な緑地も存在している。巨木の間を歩けば自分が世界で最も人口密度の高い首都圏にいることを忘れてしまいそうになる。前述の小規模な緑地と比較すると、このような大規模な緑地自体は世界的に見れば特異ではないかもしれないが、日本独特のアニメ文化によって、私はこの緑地で仮想と現実が重なるように感じた。新海誠監督の作品「言の葉の庭」では、朝のラッシュアワーの山手線と雨中の新宿御苑のベンチの印象的な映像が続き、次の瞬間に二人が出会うのだが、忙しい都会から抜け出した自然のなかでは人の心を開くことができるのかもしれない[8]。

中国と比較すると、日本の大規模な公園はより自然が多い傾向と感じる。中国の都市開発は、住宅地（団地）の計画や団地内の施設に重点を置いているのかもしれない。このような共同体的な土地制度が、中国人の公有と私有の概念を非常に曖昧なものにしている。その結果、中国では多くの公園が普通の公園を越えた使われ方をしている。例えば公園で、おじいちゃんたちがテーブルと椅子を持参してチェスをしたり、中年のおばさんたちのダンスチームがリハーサルをしたり、美容師が人の髪を切ったりしている。日本の公園では、このような社交的で日常的な公共の光景はあまり見られない。例外は、春のお花見やお祭りのような、特別な季節に人々が公園に集まり社交することである[9]。

日本では、中国のような日常的な共同性は大きな公園で起こるものではなく、前述のように住宅地のなかで点在し、小さな公園や通りに拡散しているのだ。

1　連続の窓手すり

2　窓手すりに植木鉢を吊る

3　つる性植物

4　植物のスペース　（撮影：YU ZILIANG）

5　谷中の松

6　公園のベンチ

7　大岡山の神社

上／8　新宿御苑のベンチ　下／9　新宿御苑のお花見